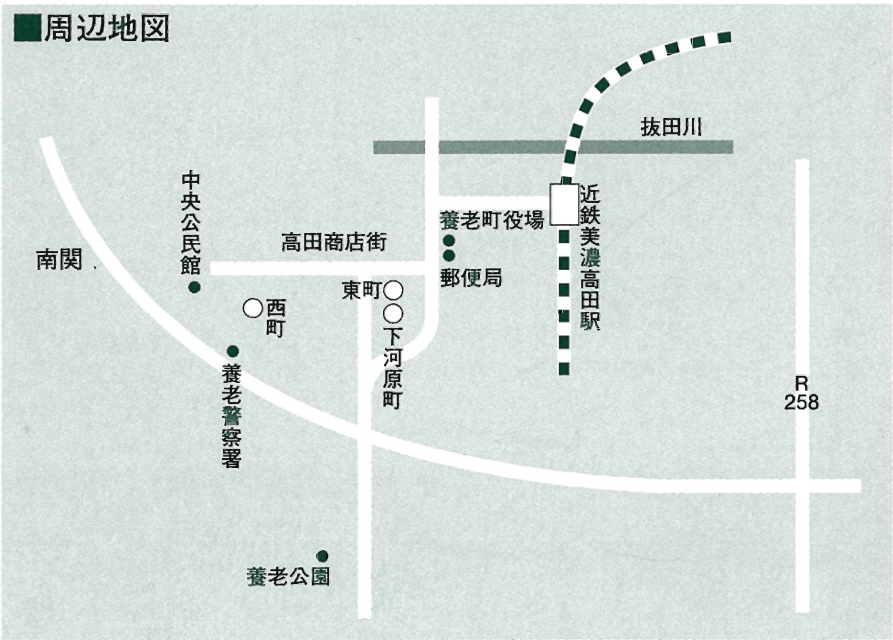


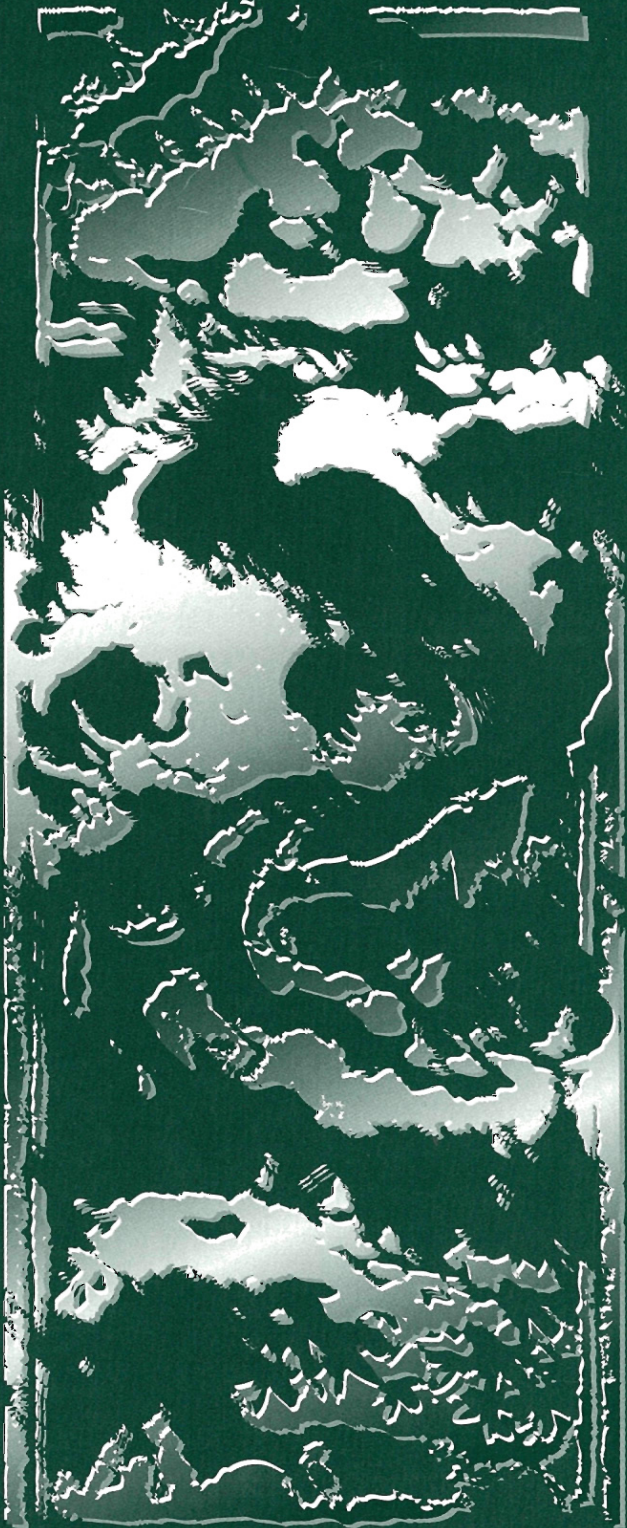
THE
TAKADA
SPRING
FESTIVAL

表紙彫り物「松鷲」のご説明

前軸の左右襖に設けられる。収納箱書に左の様にあって、
弘化四丁末年六月求之 松鷲狹間入
信州諏訪住彫師和四郎 姿鷲狹間入
弘化四年に仕上げている。使用材は縦136.1cm、横55.5cmのケヤキの一枚板で20cmに及ぶ厚い彫りである。
主題植物はゴヨウマツ、下部の植物はシャクナゲの葉、ナツツタ等ではないか、一方鷲は鋭い目、鋭利な嘴大形の翼など猛鳥の様を示している。恐らく本州山地にすむイヌワシと比定できる。雄雌一対を静と動で示す和四郎の非凡の才能である。



高田祭り曳軸



養老町

THE
TAKADA
SPRING
FESTIVAL

高田祭り曳軸

養老

THE TAKADA SPRING FESTIVAL

西町

猩々軸

猩々軸は宝暦12年(1762)にできたものです。

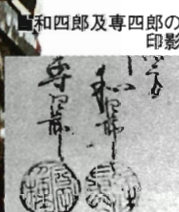
寛政6年(1794)の高田町の大火で消失し、
現在の軸は10年かけ天保3年(1832)に完成しました。

また14年かかって安政4年(1857)までに彫物一式、
下勾欄の青貝塗、上勾欄の金具の取付等を行いました。
特に彫物は信州諏訪の三代目立川和四郎・四代目専四郎の
作で特に優れており、県の重要文化財に指定されています。

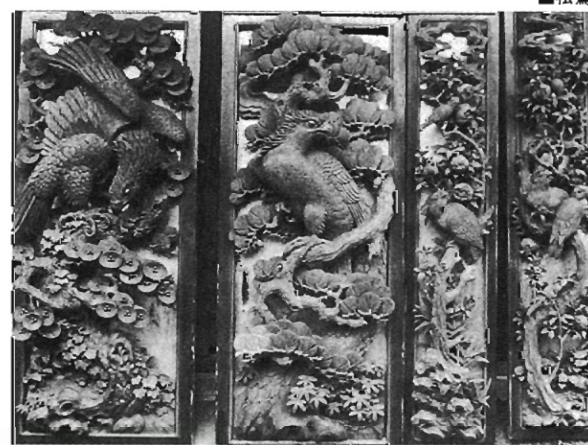
この軸の猩々人形は、謡曲(猩々)に合わせて、
からくりで踊らせます。

軸の高さ6.37m、間口2.9m、奥行3.9m、

この軸は、西町軸組の所有で、
押越字南813、810-2に格納しております。

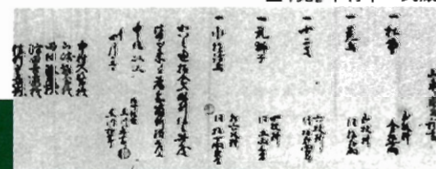


和四郎及専四郎の
印影



■松鷲

■『覚』中村準一氏蔵



■松鷲狭間入の箱書



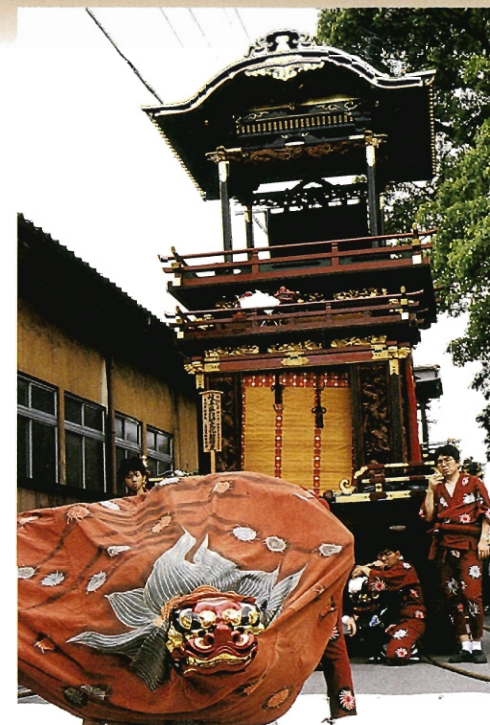
東町



林和靖軸

東町軸は、高田町の本通りの中町から東町の住民に所属する軸であります。この
軸の始めは、宝暦十二年(一七六二)に愛宕神社の祭を盛大にするために、東町に御
旅所を建立してからであります。西、東町及び下河原の曳軸の始まりが下河原の
永代記録にのっています。軸はその後、町内の火災にあつて、焼けています。現在の
軸は名古屋市伝馬町の軸を購入したものと伝えます。からくり人形の林和靖・唐子・
鶴は名古屋で天保・嘉永年間(一八三〇)一八五四に活躍した真守の作といえます。
林和靖という仙人が読書している所へ鶴が羽飛んできて、菜の葉を啄んでに食べ
させようとしている。その鶴を追いかうとする動作を巧みに操るからくりは面
白い。軸の高さ六・五メートル、間口二・九メートル、奥行四・一メートル、所在地は高田
四二五番地の三。

下河原町

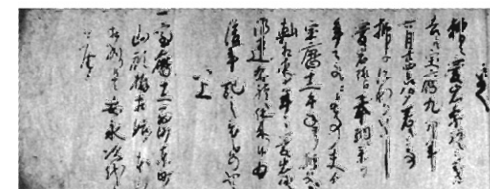


神楽獅子軸

下河原の軸の始まりは宝暦九年(一七五九)六月二十四日の愛
宕神社祭礼に若衆が獅子にわかを奉納したことがきっかけ
となつて、同十二年に獅子軸を求めました。この年には、愛
宕神社の御旅所が東町に建立され、西町、東町も軸を揃えて、
三輛の軸を曳き、祭を盛大にしました。この三輛の軸が揃つ
たことは、下河原の神楽連中の「永代記録」の中に記してあ
ります。寛政六年(一七九四)高田の大火によつて軸は消失し、天保元年(一八三〇)
に長良北町の軸を九両一分で買い求めたとあります。また同記録には天保五年に
大垣俵町で猩々緋幕を金二十三両で買い求めたとあります。軸の高さ六・五メー
トル、間口二・九五メートル、奥行三・六メートル、所在地は高田三八九番地。



■永代記録は安政2年以
前を写し、以後はその都度
記入したもので裏に「神楽
連中」とあり。

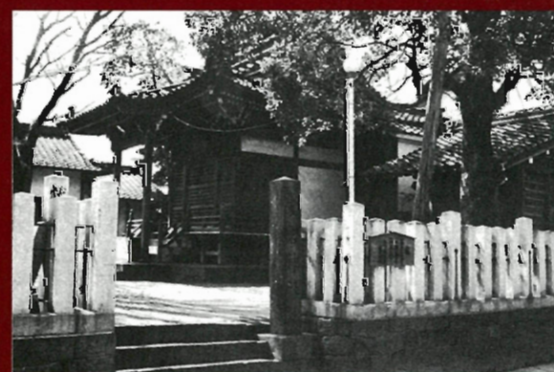


養老高田の春祭

養老町高田に鎮座する愛宕神社
(祭神火産靈神)の春祭は毎年五
月の第三土曜日と翌日曜日(試行)
に行われる。各町内では五月に
入れば、夫々祭の委員や奉行等
が選ばれ、町を挙げて盛大な祭
となる。

当日は、西町の猩々軸、東町の林
和靖軸、下河原の神楽獅子軸の
三輛が曳かれ、優雅で快適な横笛
太鼓の囃、謡と揃いの法被・ゆか
た姿の軸曳の掛声拍子木の音も
勇ましく、重い軸がぎゅぎゅと軋
りつつ静かに進み、処々で留つて、
夫々の舞や芸を演じて行く様は、
得もいわれぬ、あでやかで荘厳で
もある。

なお、この軸の保存については、昭
和五五年九月一日に新しい組織の
高田曳軸保存会を設立した。



高田祭と曳軸

祭儀は早朝神社前で奉納される下河原の獅子舞から始まり午前十一時から多く
の神職の方々にて例祭の祝詞奉読、舞姫の清楚な姿も神々しく振る鈴の音に気
も澄む「浦安の舞」があり、つづいて神幸の儀が行われ各町内の委員氏子總代
等が威儀を正して警固の行列をしき東町の神幸神社(御旅所)へ御形代(御
神体)が遷られる。三輛の軸はこれに随行する。この高田祭を境として農繁期に
入るのでこの日の人出は数万とも云われ祭の賑わい一色で町中が満される。夜
になって八時には「還幸の儀が」行われ同じく三輛の軸が軸一杯に提灯や雪洞
に灯を点じて随行し、九時ころに御形代は再び本宮に鎮められる。

